

優秀賞

父の背中

鹿児島県 西之表市立安城小学校六年 丹野 和馬

「今日は、快晴。洗濯日和だね。」

家庭科の時間、先生はふっと窓から空を見上げると、
はずんだ声でそう言った。そして、手洗いの手順を
説明していく。ボタン一つで洗濯から乾燥までして
くれる、洗濯機でやればいいのに。今どき手洗いな
んて面倒くさい。たらいに自分の体育服とくつ下を
入れて、洗い場へ行く。ぼくの心はどんより曇り空だ
った。服の汚れ具合に合わせて、おし洗いやつまみ
洗いといろいろ試した。水がどんどんごっつていく。
落ちてる落ちてる。洗う手にも力が入る。いつの間
にか夢中になって、洗濯物と格とうしていた。しゃ
がんだまま洗ったから腰が痛い。でも、汚れが落ち
て元の色を取り戻した体育服、汚臭い服から石けん
の香りに包まれた服を手にとると、なんとも言えな
い清々しい風がふきぬけた。そして、心のどんより
雲はどこかへ行ったようだった。

ぼくは、父と二人暮らし。今まで十一年間ずっと
家事は父が担当してきた。父の朝は早い。毎朝五時
起きで洗濯を回す。その間に朝食作り。ぼくが起き
て一緒に食事をして、先に食べ終わって、洗濯干し
にかかる。もちろん、晴れた日は毎日洗濯。雨が続
くと除湿器で部屋干し。冬は、浴そうのお湯をバケ
ツで何度も洗濯機に移して洗うこともあった。週末
はアイロンがけして給食着も持たせてくれる。そん
な父の背中をぼくはずっと見てきた。

夏休み家事に挑戦する宿題があった。ぼくはこれ
まで茶碗洗いや洗濯物の取り入れ、ふとん干しなど
頼まれたら、しかたなくやっていた。何しよう。父
の仕事だからあたり前のようにやってもらっていた
のに。いつも黙々と家事をこなす父に思い切って聞
いてみた。

「楽しんでやるようにしているよ。片づけは苦手だ

けど、料理も洗濯も苦ではないし。」
と、父が少しはにかみながら教えてくれた。そして、
こうつけ加えた。

「ソフトのくつ下は二度洗いしてもなかなか落ちないんだぞ。和馬もやってみないか。」

急な提案にどうしようか迷ったけれども、洗濯のやり方を習ったばかりだし、

「分かった。試合のときのくつ下ね。」

七月下旬、約束通り試合から帰ってユニホームをぬぐと、風呂場にかけてこみさっそくくつ下の手洗いを始めた。石けんが茶色に変わるほど、汗と泥まみれのくつ下。二十分もかかった。

青空の下、真っ白になったくつ下が、風にゆられている。大きく両手を広げて息を吸うと、ほんのり海の香りも胸にしみわたる。ぼくの心もすっきりと晴れ渡っている。いつも前向きに家事をこなし、背中であかしの大切さを教えてくれる父。ぼくのおこがれの背中だ。そんな父の、驚く笑顔が見たくて、ぼくはくつ下をつかんで、大きな声で父を呼んだ。

